

# 座談会 地域から学ぶ 地域社会研究会を終えて

「地域社会研究会」は地域社会と行政の現状とかかわり方について、五十八年度から六十年年度までの三年間にわたり、調査・研究をすすめてきた。結果は「まち1986」として報告したが、今回は、報告書で市内五地区（南区別所、港南区港南台、保土ヶ谷区西谷、旭区希望が丘、戸塚区千秀）の報告を行った地域社会研究会作業部会のメンバーに集まっていたとき、地域社会の現状や行政課題について話し合ってもらった。

司会は、「まち1986」の装幀・編集協力をしていただいた「編集

プロダクション・ダディ」の渡辺光次氏にお願ひしました。（編集部）

## 一——五地区の概要

**渡辺** この五地区の中では、だいぶ性格は違うと思うのですけれども、それぞれ一言で、この地域はこういうまちだったというのを思い出していただくと、その違いから、いろいろ裏のどろどろした部分まで伺っていただくと、ばと思ふのですけれども。

まず、塩野さんからお願ひします。

## 南区別所

**塩野** 僕は南区の別所町友会を担当したんですが、どういふ特色があるかというのは難しいんです。けれども、そこをあえて言うと、とにかくよくも悪くも人口急増に条件づけられたまちという感じはします。

**横浜市** 全体が三十年代以降に人口膨張していく中で、都市の問題が未解決で今まで残っていると思うのですけれども、その地域の人間関係を含めて、いろいろな矛盾というのが解決されないまま、とにかく組織膨張がどんどん行われ、いつの間にか、

- 一——五地区の概要
- 二——まちの活力
- 三——まち意識
- 四——活動の担い手
- 五——まちを歩いてみてきたもの
- 六——これからの行政

南区第一の町内会になってしまっただ。今なお、組織膨張は続いているんですけども、その辺のしわ寄せみたいなものが今の町内会のあり方に影響を与えていつているような感じがするんですよ。

**渡辺** やはり新住民と地の人みたいなギャップというのはかなり出てきているんですか。

**塩野** この別所町友会が発足した当時は約百世帯ということで、現在は二千三百五十世帯ぐらいになっていますので、十八倍以上の急増なんですけれども、町友会が発足した当時

は地つきの人が管理しているという形だったらいいんですよ。それで、今の会長も、昭和十年代に移り住んだのでよそ者という目で見られていて、地つき層との苦労みたいなものをしよいながら、いつの間にか、現在では何から何まで全部自分で切り回すという、まちの中心的人物になっていったんですよ。やっぱり隠然として、地つきの人たちの発言力はかなり強いということはあると思うんですよ。

#### 港南区港南台

渡辺 じゃ、とりあえずざっと伺うとして、村田さんはいかがですか。

村田 僕は港南区の港南台を担当したわけなんですけれども、港南台というのは、大規模開発された新興住宅地だという、その一言で済んでしまいうわけなんですよね。まちの特徴としては、昭和四十年ごろまでは全く、円海山のふもとの山合いの、当時の高度経済成長から乗りおくれた農村地帯みたいな印象があって、それが住宅公団によって開発されて、

ほんの短い間に大きく変わった。この五地区の中では変化が激しかったまちだと思っんです。

開発が終わって、人が住み始めたのが四十八、九年あたりなんです、まだ十二、三年なわけですから、その間に人口が急にふえた。だからいわゆる地つきの人、新住民みたいな分け方をすると、大規模開発の前から住んでいる人が地つきの人で、昭和四十八年ごろから住み始めた人が新住民ということで、ある意味ではすっきりと分けられちゃうんですね。ほかの地区は割と、その辺が錯綜している部分があると思うんですけども。

渡辺 人口比みたいなことで言うと、地つきの人というのはかなり少ないですか。

村田 少ないです。新住民が圧倒的に多いです。

渡辺 その点また違うでしょうね、そういう関係みたいなものは。

村田 ええ。だから、割とほかの地区に比べると、問題がすっきりととらえやすいという感じはあると思っ

ますね。新住民の人にしても、例えばその地域でどの人が地つきの人だというのは、明らかにばつとわかってしまっんですよね。だから、そういう意味では問題がわかりやすい。

#### 保土ヶ谷区西谷

渡辺 松井さんはいかがですか。

松井 保土ヶ谷区の西谷町を担当したんですけれども、西谷町は、戸建中心の町で、相鉄線の西谷駅を中心にまちができてきました。このまちをレポートしてみた結果、おとなしくて小ぢんまりまとまっているという答えがでたんです。そういうおとなしさを見てみると、地域に活力がないのかなあという評価につながってしまうのですが。

西谷町は、人口でみますと、昭和五十年ぐらいから少しずつ減り始めています。一世帯当たりの人数も減り出していますから、核家族化という問題は多分出ていると思うんです。若い人が入ってこないから、当然子供も少ない。多分、今後高齢化という問題は当然出てくると思うん

#### 座談会出席者

司会・渡辺光次(編集プロダク

ション・ダディ)(「まち1

986」装幀・編集協力)

塩野孝志(保土ヶ谷区政推進

課調整係長)(南区別所担当)

村田和義(港南区区政推進課

民相談室)(港南区港南台担

当)

松井正幸(保土ヶ谷区政推進

課調整係)(保土ヶ谷区西谷

担当)

大徳 努(戸塚区市民課地域振

興係)(戸塚区千秀担当)

加藤勝彦(企画財政局都市科学

研究室)(旭区希望が丘担当)

です、そういう兆候もあらわれて

います。

だから、そういう落ち着いたまちのせいか、一見すると非常におとなしいという感じがするのです。それ

が、港南台みたいな、活火山というんですか、活動がさまざまな形で行われているところに比べると、何か特色のないという感じがする原因ではないかと思えます。

商店街を持っているんですけどもその商店街も、横浜駅に近いというところで横浜駅周辺の駅前商店街に共通した悩みを持っていると感じました。

渡辺 例えば地つきの人と新しい住民との対立というような面はどうですか。

松井 これは人口の急増した時期を見るとわかりますけれども、大体昭和三十年代以降に外からサラリーマン層の人が入ってきていますから、ここも案外はつきり分かれるんですよ。ただ、地つきの人というのが、土地は持っているけれども、当時、非常に貧乏だったというので、ほかの農村地区と違って地つきの人が町内会とかいうものをほとんど手がけることができなかった。当時は町内会活動をやる余裕がなかったというので新しく入ってきた人が、だ

んだん町内会を指導していったようです。その構造は今も変わらないですね。ですから、地つきの人はあんまり町内会の表面に出てこない。

ただ、土地を買ったりするときに、初めて土地所有者としての地つきの人というのが表面に出てくる。たまたま今度は西谷に地区センターができましたから、その用地の交渉のときにそういう構造が表面にあらわれてきました。地つきの人は地つきの人ということで、消防団という形で独特のまとまりを持っている。町内会には、協力はするけれども積極的に、活動しない。

今年の春、連合町内会長がかわりましてね。それが女の連合町内会長なのです。それというのも、前の連合町内会長が大体五年から十年やればいいんだということで、自分からおりにいるんですね。そういう意味の民主性みたいなのは比較的保たれているような感じがします。それは恐らく、サラリーマン層だからそういう割り切り方ができるのかなという感じはします。

渡辺 そうすると、まちが機能し始めたのは、開発以降、新住民によってということですね。

松井 そうですね。もともと郊外の農村部——完全な農業地帯ではないですけれども——そういうところが、駅に近いということもありまして、昭和三十年以降人口がふえて、商店の数が増えていって商店街ができたということですから、西谷の場合には、よくも悪くも、横浜市の膨張とまちの膨張というのが一致していると思うんですね。

旭区希望が丘

渡辺 加藤さんの場合はいかがですか。

加藤 旭区の希望が丘を担当したんですけれども、ここも一口で言うと、完全な住宅地なんですね。住宅の出発点というのが、相鉄線の希望ヶ丘駅ができて、それから、大体今まで、開発としては三十年ぐらいたっているんです。

それから、開発後大体三十年ぐらいたっているので、港南台と比べると

とかなり活動が落ちついているというか、組織対応をしているんですね。自治会・町内会にしても、各種団体にしても、いろいろな活動に対して組織対応をするというのがかなり特徴じゃないかなというのは言えます。

それから、活動の中心が、三十年ぐらいたっているもので、例えば道路とか下水とかという環境整備から、最近はだんだん福祉に重点を置くような活動に移ってきている、というのが特徴ではないかという感じがします。

施設面で言えば、地区センターが市内で一番最初にできたこともあり、施設はかなり早くから整備されていて、それも活動が、よく言えば落ちついているという場所だと思えます。

渡辺 新住民と旧住民の関係はどうですか。

加藤 旧住民というのがすごく少ないというか、地主はもろんいたんですけれども、活動は、そもそもの最初のころは地主がやっていたそう

なんです、今では三十年ぐらい前に来た人たちが中心になって、地域の活動のリーダーという形でやってきて、三十年たっているから逆に今度は、新住民の中で世代交代がぼちぼち起ころう時期にきていますね。

渡辺 ここもサラリーマンがほとんどということですね。



加藤 最近、高層住宅もぼちぼち出てきていますけれども、一戸建ての方が中心でほとんどサラリーマンですね。

渡辺 かなり行政の手が行き渡っているというような感じですか。

加藤 あと一つ特徴として挙げれば、連合の会長とか、各種委員とか

団体に、公務員が結構いてね。市の職員がいたり、国家公務員がいたり、県の職員がいたりということ、公務員がかなり活動を担っているというの、ほかと比較すれば際立った特徴になるのではないかと思います。

戸塚区千秀

渡辺 大徳さん、いかがですか。

大徳 私は戸塚区の千秀地区を担当したんですが、横浜市内で一番端っこというか、郊外のところなんです。港南台が一番新しいまちだとすれば、その対極にあるまちというような感じですよ。しかし、地域的に見ると港南台はすぐ隣。村田さんがさっき、港南台も昭和四十年代の初めぐらいまでは山合いの農村だったというふうに言っていましたけれども、それが全くそのまま今も残っているというようなまちです。

自然環境を見ても、田んぼだとか山だとかが残っている市街化調整区域です。ただ、半分近くを工場が占めている工場と農村が併存している

ようなまちです。

社会的に見ても、旧来の農村共同体の伝統がまだ色濃く残っているというような地域で、人口が戦前から比べてもあまりふえてない。三、四倍ぐらいの感じで、人口比で見ると多分、三分の一か四分の一ぐらいは地つきの人じゃないか。だから、五地区の中では一番地つきの人間が多いようなまちですね。

ですから、ここでは、町内会の会長というのはみんな地つきなんです。昔から現在まで、地つきの人しかやったことがない。千秀地区の三つの町（田谷町・金井町・長尾台町）のうち、長尾台町は、地つきの有力者が十軒ほどあるんですが、その十軒ほどで、町内会長を順番でやっている地域なんです。

もう一つは、町内会費も、田谷町はそうではないんですけども、金井町と長尾台町は、地つきの人が高い会費を払っている。アパートの人間が一番会費が低いというように、会費がランクづけされているわけですね。

ただ、そういった地域ですけれども、それとは違う動きもあるわけなんです。自主活動グループもあるし、話を聞いてみるとそれなりの活動もしている、新しい動きというのにもある。

渡辺 新旧があまりすっきりと分かれずに混在しているんですか。

大徳 町内会の方でも、全くそういう新しい動きを無視しているのではなくて、改革のような事をやっているんです。だから、田谷の町内会の場合には、先程言った会費の段階制を一律に改めているし、また新住民も役員に入れるようにしているわけなんです。町内会長は地つきの人だけでも、それ以外の役員には新しい人も入れるような形にしている。まあ、うまくそういう改革の努力で新しい動きを吸収しているというような感じですかね。

渡辺 何か村というような感じですかね。

大徳 そうなんです。新旧が混在している村という感じですね。

## 二——まちの活力

渡辺 いまお話を伺っていると、別所や千秀というのは、古い人間関係とかが比較的残っている。港南台、西谷、希望が丘というのは比較的新しい、風通しが意外といいような感じがするんですけども、まちの活力というのはどうなんでしょうね。

### 「地つきの人」と「転入者」

塩野 別所の場合、地つきの人というのをもうちょっと注釈を加えると、戦前からいた人というのは、せいぜい百戸未満で、そんなにいるわけではないですよ。ですから、三十年代以後、真ん中を走っている道路に自営業の人が張りついたり、それから、開発によってどんどんサラリーマン層が入ってきたりという中で、今の地域を担当している部長さんは十七人なんですけれども、その人たちも多くは三十年代四十年代に入ってきている人たちなんです。ですから、年代を追って徐々に徐々に入ってきて、そのうちの比較的古

い人というのが、今の町友会を支えているメンバーなので、そんなに地つきが強いというほどじゃないんですね。その中で、新参者とか、そういうふうなことも聞かれるということなんです。

大徳 だから、別所と千秀は近いと言われたけれども、やっぱり随分違う感じがするんですね。千秀では地つきの人じゃないと、町内会長はとつてもやれないような雰囲気ですよね。

松井 今のまちができた時期でいいますと、一番若いのが港南台で、十年か十五年たっています。大体三十年ぐらいたってまちができてきたのが、多分別所、西谷、希望が丘、それぐらいだと思うんですね。千秀というのはもっと古い村的なものが残っていると思いますが、三十年以降入ってきた人は、西谷もほとんどそうなんです。いまだに地つきの人じゃないんですよ。地つきの人というのは、土地所有者であって古くからいるという人なんです。

この五地区ではそれほどではない

ですけれども、ほかの地区では、地つきの人の力が持っているという場合が意外に多いのではないですか。

中心区を除いて、周辺区、それから郊区ではそうしたケースが多いのではないですか。逆に、連合町内会長をサラリーマン層の人がやっているというのもふえ始めています。数から言うとうどうですかね、半々ぐらいですかね。

渡辺 ほかの地区では、やはりそういう傾向がありますか。

加藤 希望が丘の場合は、当初は、地区センターの土地を提供したような地主が、その当時の地域の役員をかなりやっていた。それが、自治会・町内会の運営の問題とか、行政との接触などで、だんだん新しいサラリーマン層が組織的に運営をやるようになって、その人たちが今は実質すべて握っているというのか、その方が行政との関係でもかなりうまくやっていくというふうに、だんだん変わってきていますね。

松井 事務処理能力があるんでしょ

うね。

塩野 おもしろかったのは、十七人のうちの何人かの部長さんに会ったんですけども、ほとんど自営業の人なんです。サラリーマンというのはほとんど役員に入っていないんです。しかも、名前は全部男の名前で出しているながら、実際にやっているのは全部奥さんなんです。

渡辺 ほかの地域は。

村田 港南台の場合は、今は港南台連合自治会という一つの連合町内会組織があるわけなんです。もとは日野町連合町内会というのがありまして、それは港南台が農村だったころから、ずうっとそのエリアですけれども、港南台が開発されまして、ある時期、そこが港南台という一つの連合自治会として、日野町連合町内会から独立するような形で一つの連合をつくったわけなんです。

日野町連合町内会の会長さんというのは、もとは港南台あたりの地主さんで、昔からの地つきの人で、その人が港南台を開発する前から会長さんで、今もずうっと、今では隣の



連合になった日野町連合町内会の会長さんをやっているわけですね。だから、港南台の場合には、新住民が——新住民だけというわけではないんだけれども、そっちのエリアに住んでいる旧住民の人も当然入っているわけですが——一つの連合として独立するぐらい、数の力というか、そういうものがあつたというのが一つのポイントだと思ふんですね。もし港南台の開発の規模が、もっと小さな規模の開発であつたら、多分日野町連合町内会という昔の農村的なものを引きずっている連合町内会のエリアの中の一つの新しいまち、という感じで取り込まれたんだろうけ

れども、そういう形にならなかつたということですね。

**渡辺** やはりそれぞれの地区で、力のありようというのが違いますね。

#### 世代交代

**松井** どの地域でも二十年、三十年たつてきていますから、従来のままではいかなくなってきている。さっきの戸塚区田谷町の話のように、お互いに努力するみたいなどころが出始めている。

西谷の場合は、商店街が変化し始めています。商店街は三十年代以降ふえてきているんですけども、今まで町内会とは一線を画していたんです。普通、商店街のあるところというのは、商店街というのは当然お金を持っていますから、町内会の有力な役員を占めているケースが多いんです。ところが、西谷の場合ははっきり、地域の問題に商店街はかわってこなかつたんですね。で、地域の問題は町内会にまかせきりにしてきたんです。

ところが、最近商店街としても

客を呼ぶのに苦労し始めている。今まで地域の問題を無視していたんですけども、商店もただ物売のだけではやっていけなくなつてきているんですね。つまり、地域のイベントとかいろいろなものを何か商店街も考えていかないと、人を呼び寄せられないという。そういう意味で、逆に商店街の方が地域のいろいろな問題に積極的に取り組み始めた。

一つには、世代交代が商店主の中に出始めた。つまり、最初に入ってきた人たちが引退して、その息子たち、つまり三十代、四十代の人が出主にかわつてきたというの大きな要因です。

多分そういう意味では、新住民と言われる人たちが三十年たてばだんだん定着してくるといえるのではないのでしょうか。新しく入つてきた人の息子の世代は、もう生まれたときからそこに住んでいるというのがありますから、そういう点では、学校で地の人の子供とも同級生だという関係になつていって、自然に交流というふうなものがでてくる。やっぱり

り時間がたてばそういうふうになつてくるんじゃないですかね。

**渡辺** 例えば大徳さんの千秀地区はそういう意味でいけば本当に古い、村と言えば村なんですけれども、やはり地主だとか力があるというのは、新しい人たちには力関係みたいなものがはつきりしているわけですね。

**大徳** そんな印象でしたかね。  
**渡辺** 新しく入り込むためには、世代交代していくとか、そういうことしかないわけですか。

#### 町内会費のランクづけ

**大徳** そんな印象を持ちましたね。

それが一番端的に示されているのが会費の問題のような気がしたんですけどもね。やっぱり会費を多く払っている方が発言力は大きいと思ふんですね。

**村田** 会費が一律じゃないというのは、結構ほかにもあるんじゃないですか。僕の知っている町内会の中には、会費が一口幾らと決まっています、何口かは自分で申告するんです

よ。

大徳 ただ、一般的にランクづけするような、会費というのは旧来の農村地帯に特有の会費なんじゃないのかな。

村田 どうなのかなあ。僕が今言ったのは、南区の、割合昔から下町的なところなんですが。

大徳 港南台みたいな新興住宅地であれば、当然会費というのはい律というふうな考え方をするでしょう。

それが民主的だという考え方だと思うんですね。だれでも一緒の金を払っているから、発言権も同じだけあるということだと思っただけでも、ところが、そうじゃないわけですね。

大徳 配分というのは完全に決められているんですか。例えば何口出そうという、自分で選べるというのとは民主的な方法だとは思っただけでも——大小はあっても——千秀の場合はどうなんですか、多く払うか払わないかというのは決められているわけですか。

大徳 例えば長尾台町で言うと、地

主が八百円で、一応家も土地も持っている人が四百円で、土地は借りていても家は持っているというのが二百五十円で……

渡辺 そういう分け方というのは、すごいリアルですね。(笑)

大徳 借家の場合が二百円で、アパートが百七十円とか、住宅の所有形態で決められているわけです。

渡辺 一種の階級構造みたいなものですね。

大徳 そうなんです。それで大体権力構造も類推できるということになる。

渡辺 幾ら払っているということとで、会費の額でそのステータスみたいなものがわかるわけですね。

大徳 そんな感じですね。

村田 港南台は、一つの自治会のエリアで見ると、そういう家の持ち方の違いというものがそもそもないわけだからね。高層団地だったらもうみんな同じ、例えば二LDKだったら二LDKにみんな住んでいるわけだし。

松井 町内会費は一律というのは全

市的にみても、普通ではないでしょうか。千秀のように村的色彩がそこまで強いというのは、特殊な方だと思っんです。多分、市街化調整区域

というのがあって、新しく入ってくる人数が少ないからそれが保てるわけですね。

市街化調整区域がなくて、西谷とか希望が丘みたいに全部住宅地化されれば、力関係も新住民と旧住民、そんなに差がなくなってくると思うんですね。村的なものが残っているのは、新しい人といってもぼつぼつでしょう。力関係から言って混合するほど入ってきてないということですかね。

加藤 戸塚では、ランクづけしているのは、ほかにないですか。

大徳 どうだろうなあ、よくわからない。ともかく、この地区だと長尾台、金井がそうだったでしょう。田谷も昔はそうだったということ、このあたりでは一般的だったような感じですね。

町内会費と活動

渡辺 別所ではどうですか。例えば会費みたいところで見る経済的な力の差はありますか。

塩野 別所の場合には、三十五年ぐらいから今まで、一律五十円会費を堅持しているということ、これはほかの自治会・町内会に比べると際立った特徴を持っているんですね。それについては、会長の個性と

いうのが強くあって、町会というのは最低必要限度のことをやっていけばいいのであって、あんまりぜいたくなことをやるべきではないという考え方があられるらしいんです。

それはどういふことかなあと僕は考えたんですけども、それはある意味で地域の住民がうまくまとまっているからそうになっているのか、それとも、まとまりがないからそういう状態でいられるのかというふうに考えたんですよ。その一つの答えを部長さんの一人が言ったんですけども、「五十円会費じゃ何もできませんよ。事実上、うちの町では、子供会は活発にやっているけれども、

私

町会としては何もやってません。私

も部長をやっているけれども、ただ広報を配って、町会費を年二回徴収するだけで、仕事らしい仕事は何もありません。会長が全部やっています」という形なんですよ。

大きな組織という条件と相まって、住民の声を受けて町会を運営すると、それだけの運動量とかボリュームに必要な財政はどうしても必要なんだというふうな形での会費のとりえ方というのはしてきてないんですね。

それで、おもしろい話があったんですけど、最近まで婦人部があったらしいんです。主婦たちが集まると、生活環境の要求みたいなもの



がかなり出てきたらしいんですけども、そんなぜいたくを言うなという形で町会の中で対立して、なくなってしまったらしいんですね。ほかの地域には大体婦人会があるんですけども、この地域は婦人会がないんですよ。それはちよっとおかしんじゃないかというのを、主婦の一人も言っているんです。

人口が急増して、都市化がどんどん進んで、地域環境としてはいろいろな要望が出てくるはずなんですね。それを町会がきちっと対応して、そういったものが新しい町会の発展のバネとか、みんなの親睦なり団結のバネになってくれば、また違う展開を見せたのだろうと思うんですけども、そういう生活環境の要求みたいなものは町会はやらないよという形で逃げてしまっていますので、組織としてはきれいな形であるんですが、役員同士の連帯感というのはあんまり感じられないんですね。

大きな運動会などをやるときは、自営業の人たちの寄付で運営されて

いて、大多数の五十円会費を払っているサラリーマン世帯というのは、町の中心的なイベントの部分でもそんなに参与してないというような状況があるんです。だから、五十円会費を堅持するというのは、できるだけむだを少なくして、みんながとにかく努力をして町会を盛り立てましょうというふうなものとは違う内容になっていて、大分気になっているんです。

#### 資金と人材

渡辺 そういう意味では希望が丘は、かなり組織的な対応がうまくしているというのは、会費など経済的な面から言っても、全体がうまく機能しているというような部分があるんじゃないですか。ある一定の力で動くというふうな……。

加藤 希望が丘の場合には活動をかなりいろいろな形でやっているんです。それで、必要になれば会費を上げてでもやるというので、老人給食を行っていらっしゃるけれども、老人給食をスタートする時には、社会福

祉協議会の方から、スタートの年だけは金が出るんですが、後は出ないです。その金をどうしようかということでも連合で話し合っていて、それは非常に大事なことから会費を値上げしましょうということになった。そこで、五〇%アップしたんですね。五〇%は福祉に使いますよということでも値上げを提案してそれが通って、それを老人給食の方に回してその資金に充てている。

ということで、活動を広げた場合には、その活動に見合った金を、地元から集めるなり、あるいはその金を、例えば行政の何らかの名目で取ってくるのか、あるいは社会福祉協議会から取ってくるのか、かなり工夫するんですね。それで活動を拡充していく。また別の活動をする場合には、その資金をどうするかということもみんなで相談して、必要などころから集めてくるなり、値上げするなり、値上げしない場合にはどうしようかということでも方策をみんな練って、活動をまた新たに展開し

ていくという。

そういういろいろな取り組みがどんどん広がってくるというんですか。この報告書にも最後の方で、リハビリの關係の活動が出て、それがまた新しい展開をしようとしているというのを入れたんですけれども、

活動が広がっているんですね。今はかなり福祉活動の面にどんどん視野が広がっていている。今までの環境面での活動は比較的楽になったんで、その分を福祉の方にどんどん回していこうということで、必要ならばどんどん膨らませていくということとを積極的にやっていますね。

だから、会長だけがというよりも、そのためにいろんな団体をどんどんつくるんです。で、ほかの地域になんのような形で、レクリエーション協会ですとか、それから、婦人団体連絡協議会をつくったり、活動に見合った組織をまた新たにどんどんつくっていくんですね。そこにそれぞれいろいろな人がその地域から集まってくるので、人材の面でもかなりできています。資金の面でもできてくる

ということ、人材と資金を両方合わせて活動に対応するという面があると思いますね。

村田 希望が丘で、新しくどんどん組織をつくりますよね。そういうのは、もうかなり根づいてるわけですか。

加藤 根づいています。新しい組織ができてくるというのが、大体四十年代なんですよね。四十年代にできた組織というのは、各種団体みたいなことで、さっき言ったレクリエーション協会とか婦人協みたいになっているんです。ごく最近、ここ五、六年出てきたのは、ボランティア組織のような形で出てくるんですね。老人給食にしてもリハビリにしても、ボランティア組織ということでも登場してきて、連合自治会なり社会福祉協議会なりがバックアップしてあって、それがまた一個の組織になっていくというような形になってきています。

村田 港南台も、割と発想としては希望が丘に近いと思うんですね、組織に対する考え方とか。港南台中

心になってやっているのはサラリーマン層が多いんです。希望が丘みたいに公務員は多くないですけれど

も。その辺の活動に対する割り切り方とか、組織的な物の考え方というのは似ていると思うんですよ。ただ、今新しく団体ができてくるのが四十年代という話がありましたけれど

も、港南台の場合には、新しくそういうものができてくるというが、大体五十年代の終わりごろから六十年代の今もできつつあるという感じですね。だから、例えば港南台だと、地域連絡会とか、最近できた港南台文化会議とかあるけれども、その辺がどういう形で地域に組織として根づいていくかというのはまだこれからなんじゃないかなと、そういう感じですね。

#### 財産管理の苦勞

渡辺 ちよっと戻りますけれども、町内会費の現状みたいなのはどうなんでしょうか。

村田 港南台は一律幾らという感じ、そんなに特徴的にこうだという

ことはないと思います。

渡辺 西谷は、昼間人口というのは非常に少ないですよ。そういう意味からも大分事情は違ってくるんじゃないですか。

松井 でも、戸建てがほとんどの住宅地ですから、会費については一律です。

ただ、西谷の場合は実は、財産を持っていてるんです。報告書の中にも書いたんですけども、連合町会が連合町会館をもっています。これは地主の好意で初めは借りたり、最後は地主の土地を買い足したりしていますが、かなりの金を投資しているんです。財産は持っているけれども、逆に、そのお金を工面するのにきゅうきゅうとしているみたいないところがあるんです。町内会費の年間予算はせいぜい百万円ぐらいですから、それに比べて連合町会館の敷地、土地を買い増しするにしても、何千何百万、一千万円という単位で買い増ししたりしていますからね。今まで借地したところを買っているわけです。さらに連合町会が、神社

も持っているんです。これは、土地は寄付を受けたんですけれども、鳥居を建てたり、神社の建物を建てたりするのにやはり何百万円のお金がかかる。それに、毎年じゃないですけども修理したりする。そういうお金は別途積み立てているとはいえない、その金を出すには大変苦労しています。多分、町内会費では当然対応できないんで、いろいろ工夫をしているみたいですよ。

連合町会館の場合は、そのために保育園を併設して、保育園に貸したり、あとはそろばん塾とか、あいているときはいろいろ有料の教室に貸してお金を取っているんです。神社の場合は、お正月に出す破魔矢を手づくりでつくって売って、その収益を上げています。あとは、別途神社講みたいな講をつくらせて寄付を募っています。そういう意味では、連合町会が持っている財産を維持するのに、逆にかんりの労力をさいているようです。

渡辺 それは組織的な対応なわけですか。お金を持っている人がほとんど

いうようなことではなくて。松井 そうです。

#### 権力構造と活動の現状

渡辺 千秀というのは一番異質なんですけども、いわゆる地域の権力構造と、その地域の活動の現状みたいなものへの影響というのはどうなんでしょうか。

大徳 確かにそういう権力構造があるんですけど、その中でも、さっき言ったように結構新しい動きというんですかね。スポーツ活動は結構盛んですし、そういったものというのは新住民も旧住民も変わりなく仲よくやっているとというような印象もありますよね。

渡辺 リードしていくような人というの、例えば別所のように力のある人がいて、その人が強引に統率していくという方法になるわけですか。

大徳 そういうことはない。別所の会長みたいな強烈な個性の人はいなくて、町内会長も何年もやっているわけではない。

例えば田谷町内会では組織改革をやっている、組織的に新住民のエネルギーも吸収するような形にできている。

松井 何人かの有力者がいて、順繰りに町内会長をやっているとすると、その有力者の十何人のグループというのが一つのリーダーグループになるんじゃないですか。個人としては特定じゃないけれども、その何人かの有力者グループが、町内会というか、地域を引っ張っているということになるんですかね。

大徳 引っ張っているというか、対行政という面から見ると、そういう人たちが窓口になってやるんでしょ

うけれども、実際の地域のいろいろな活動という面から見ると、そういう有力者とはまた別のところにいる進んでいるわけでしょう。

渡辺 その辺の新しい活動の担い手というのは、やっぱり新住民ということになるんですか。

大徳 新住民とも限らないんですけどもね、旧住民もいるし。

渡辺 趣味とか、そういうような共通の楽しみみたいなことの場合……

大徳 そうなんですしょうね。旧住民でも農業に携わっているという人は少ないんですよね。旧住民でも、サラリーマンですから、やっぱりそういうサラリーマン層が中心になっているのかなあ。

#### リーダーの個性

塩野 今、別所の会長の話が出たけれども、別所の会長というのは、非常にまじめでやり手で丈夫なんですよね。それで、政治力もあるんですよ。それと、一面では、難しいことをみんな分かって合いますというのがちよっと欠けているという



か、とにかく自分でどんどん率先してやっていっちゃうという性格の人です。そういう人をスーパーマンにしているというのは、住民全体も含めて、地域がつくっていったという要素が多分にあるんですね。

例えば、最初町友会が発足したときは地つきの人がやっていったということなんですけれども、そういう人たちは一線から後に引いて、新しく入ってきた会長にやらせているとかね。どんどん人が入ってきたのだからけれども、自分たちで地域のことを何かしようとか、役員に積極的に入っていくとか、そういう動きみたいなものは住民の方からは出てきていないとか。

いろいろな地域の問題が噴き上がってきて、いろいろな住民要望が出てきているときというのは、住民要望をうまくコントロールして抑えていきながら、行政の施策をうまく地域に流していくという人が、重宝な時代だったと思うんですね。そういう意味では、行政にも期待されて、とにかく顔つなぎは非常に強くなっ

た。行政との顔つなぎはすべて会長がやって、あとの人たちは全然やらないう構造みたいなものも出てきている。いろいろな意味で、地域全体がそういうスーパーマンみたいな人をつくってしまったんじゃないかという気がするんですね。

松井 別所の場合、ちよつと違うのは、町内会をになつていっているのがサラリーマン層ではなくて、自営業の人たちが担っているわけでしょう。会長も自営業なんですよ。というのは、町内会の会合を昼間やるということは、サラリーマン層を最初から排除しているんですからね。だから出れるのは奥さんか自営業の人しかいない。そういうつくり自体が、幅広く人を集めるということ、組織的な意味で保障していないことにな

る。  
塩野 そうですね。  
加藤 でも、会長の場合には、一人で行政対応なんか全部やっているけれども、新しい活動を抑えるというのはないでしょう。

塩野 地域に対する愛着とか、住民

活動に対する熱心さというのは本当に人一倍で、それぐらいの人というのは並んでないですよ。いろいろな人が入ってきたり、いろいろな活動が入ってくるのについては、どんどん受け入れて膨らませていくという姿勢は絶えず持っているんですよ。

まちの性格と開発との関係

村田 別所を見てみると、どこに問題点があるとかそういうことではなくて、何かなるべくして今の形になったという感じがすごくするんですね。

塩野 そうですね。それで、この報告書が出た後で、もうちよつと細かく地域に入ってみると、とにかく地域が広い。だいたい前に入ってきて高齢化を迎えている地域とか、これから新しい若夫婦が入ってきてつくっていくまちとか、子供が小学校とか中学校とかということ、もう地域が幾つかに別れていて、千秀とは全然違ってきているんですね。だから、そこから出てくる住民の要望

とか動きなんていうのも、よく見ると、その地域地域、本当は違う対応しなきゃいけないようなものを、まだ一律でやっている。

村田 だから、別所のある部分が港南台みたいで大規模開発されたら、そこはそこで別所町友会から独立したと思うんですね。そういう形じゃなくて、小さくぽこぽこ開発されたら、もうすべてをのみ込んでしまっているというか。

松井 そのケースの方が多んじゃないですか。希望が丘だってそうでしょう。大規模で独立の大きな開発というのは数えるほどしかない。大半の場合は、徐々に、スプーロールじゃないけれども、まちの中で開発が進んで、それを吸収しながら、まちができてきた。そうしてできたまちをよくみると、新しい人と古い人とか、いわゆるマンション系と戸建て系とかいろいろの利害が、同じまちの中でもあると思うんです。  
渡辺 まちの性格というのは、開発によってだいたい変わってくるのか、開発方法によってかなり決定づけら

れるという要素が強いですかね。

加藤 港南台は公団が全部開発したわけでしょう？

村田 ある一定のエリアはね。それが、規模で言えば市内でも有数の広さだからね。

松井 港南台は、住環境自体が最初から計算されてつくられたまちでしょう。全く道路も従来のままで、家がどんどん建っていく。しかも、入ってくる年代層によっても、同じまちの中でも、住んでいる年齢層のずれが出てくると思うんです。

ところが、まち全体がいちどでき上り、そうした状態が何十年続いてくると、住民同士が交流してくとする。そうなる、そのまちで育った人は、みんな同じ小学校を出ているから、土地所有者も賃貸に住んでいる人も、みんな顔を知っているようになってくる。そういうのがまちの歴史だと思います。横浜はそれが、せいぜい長くても三十年、四十年で急にまちがきちちゃったから、まだいろんな問題をのみ込んだまま抱えているという感じがしますね。

### 三——まち意識

渡辺 では、今までまちの中の力関係みたいなものを伺ったんですけれども、まちを愛する気持ちみたいなもの。必ずしもここで分けられたエリアの中のおらがまち意識みたいなものがあるかどうかからないんですけれども、そういうものはどういふところにあらわれてきているか。または、旧住民と新住民、開発を境にしてどういふふうに変わってきているかというの、どのようにお感じになっていきますか。

一番古い人が多いという千秀は、そういう意味では余り変化というのがあらわれていないでしょうから、独特なあらわれ方があるんじゃないかと思うのですが。

大徳 千秀地区で分区問題というのがあったんです。ちょうど緑引きの境になってしまいました、その問題に絡んで、どちらの地区に行くかというところで随分もめたんです。地つきの人というのは、昔からの結びつ

きを非常に重視するわけで、結局、地区を分割しない方向へ結論をもっていた。

渡辺 変化に対してかなり保守的な意識が、愛する気持ちというのが、変えないでくれとかですね。

大徳 土地に対する愛着とか、昔からの人間的なつき合いを重視しているというような事じゃないかなあと思いましたけれどもね。

渡辺 そうすると、愛する気持ちがゆえに、新たな活力を生み出しているとかいふ意識の転換というのはどうなんでしょう。

大徳 難しいなあ。やっぱり若い人にあるんでしょうけれどもね。

実は千秀青少年センターという、この地域の中心となるような施設があるわけなんです。それはもとの千秀小学校で、地元の人々の小学校に対する愛着が強くて、市の方針ではそれを転用するということで、どんなものになるかわからなかったんですけれども地元としては集会所施設みたいな形で残したいということで運動して、今のようなセンターに生まれ

変わった。その辺は地域に対する愛着というんですかね。特に小学校の若い卒業生が中心になって、集会所として残すというような運動をしたということがあったわけですね。

新しいまちの場合は

渡辺 港南台地区はどうなんです。また全然違う形なんじゃないかと思うんですが。そういうノスタルジックな部分というのはないと思いますし。

村田 ノスタルジックなのはなくて港南台というのは新住民が圧倒的に多くて、開発されて間もないので、とにかく今住んでいる人というのは、話を聞いてみると、それぞれのいろんな人生設計があるのだけれども、その中で割合自分で意図的に港南台という場所を選んだという意識があるんですね。多額のローンと引きかえに永住の地を得たとか。それに港南台は、高度成長期の割と末期に売り出されたところなので結構倍率が高かったんですよ。人によつては何百倍という倍率で当たっ

たとか、くじは外れたんだけども  
キャンセル待ちでやっと手に入れた  
とか、そういう意味での愛着みたい  
のはすごく感じますね。

それと、取材していて思ったのは、  
新しいまちなんです、前例みたいなも  
のが、昔からの伝統的なやり方みた  
いなものがあんまりないので、割と  
好きにやりたいように活動できると  
いう感じと、もう一つ、さつき西谷  
の一番最初のときに松井さんがちよ  
つと言っていたことと関連するのだ  
けれども、新しいまちだから、何か  
やらないとまちとしてのまとまりが  
全然出てこないという感じがあるん  
ですよ。古くからあるまちだと、何  
にもやらなくても何となくまとまっ  
ているみたいだと思っただけれど  
も。その辺で何かアドバロンを上  
げるといふか、こういうことをやり  
ますよ、活発にやっていますよとい  
わないと、まとまりが出てこない感  
じがあって、その辺がいまのところ  
うまくマッチして、何となく港南台  
というのは活力があるまちなんだと  
いう感じが出ているんじゃないか

な。

渡辺 例えばそういう場所に対する  
愛着とかが、象徴的にあらわれてい  
るような場面というのはどういうと  
ころにありますか。かなり自主活動  
というのは多いですね。

村田 多いですね。

松井 一本にまとまらないんじゃな  
いですかね、まだ港南台の場合は。

村田 今のところはね。

松井 何かの大きなイベントにばっ  
と集まるんじゃないかと、それぞれの  
位置と立場で、それぞれの思い入れ  
があつて、それぞれがばらばらとい  
うか、ある意味では自由にやってい  
るといふ感じがする。

村田 ただ、割合、子供を通して、  
PTAとか子供会とかができていく  
まとまりみたいのが結構強い場所な  
んじゃないかな。

子供を中心にして

渡辺 そういう意味では、別所はど  
うですか。

塩野 別所の場合には、住居形態が  
全然違って、戸建ての地域がまとま

つてあるかと思えば団地群があつ  
て、団地群の一画には社宅団地があ  
るとかいうことで、それも整然とし  
た区分けではなくて入りまじってい  
ますので、だいたい住民の意識がば  
らなところもあるんです。ただ共  
通して言えるんじゃないかというの  
は、そこに永住するつもりで来てい  
る人たちがほとんどです。社宅の人  
は、あるいは仮住まいかもしれませ  
んけれども、ほとんどがそこで根を  
おろすという人たちですから、よく  
聞いてみれば、地域への愛着とか、  
子供はこの地域で大きくなっていく  
という、そういう思いというのは非  
常に強くあると思うんですね。

別所の場合には、町友会よりもむ  
しろ子供会の方が活発にやっている  
ということだとか、会長自身も剣道  
部に相当熱意を入れて、剣道部に  
いては、町会の区域を越えてほかの  
町会の方まで広がっているとかいうこ  
とがある。ニコニコ会についてもそ  
うだし、水遊会についても小学生を  
対象にした水泳活動ということでも、  
子供を中心として地域の親のコミュ

ニティーの形成を図るといふ、そう  
いうものが一番全面的に出てきてい  
るといふふうに思うんですね。

ただ、ちよつと気になったのは、  
若い人の活動とか、年輩の人たちの  
活動というのがあんまり見えてこな  
いんですね。それは、上大岡の駅が  
近くにあって、その地域の中に、若  
い人たちとか大人の人たちが活動で  
きるような施設というか、場が全然  
ないということ、みんな外へ出て  
いっちゃうという条件があると思っ  
たんですね。ですから、施設も一つ  
の重層構造として理解すべきだとい  
うのは僕自身にもありますけれど  
も。

その辺というのは、親自身が子供  
を仲介としないで自分たちでグルー  
プ活動をしていくということが、ま  
だ欠けているんじゃないかという感  
じがするんです。ある部長さんに言  
ったら、別所の場合にはそれはあと  
五年ぐらいしないと出てこないんじ  
やないかと言う人もいるんですね。  
ね。

それから、これは例外だと思っ

ですけれども、ある部長さんのところへ行ったら、私のところは、通勤・通学で東京に行きやすく、比較的土壌が静かなところで別所を選んだというんです。というのは、上大岡から東京に行かれるし、別所インターがあって車で東京に行ける。それでここに住んでいるので、地域についての関心は何にもありませんという部長さんが一人いたんです。いろんな意識の人が混在しているなあという感じがしましたね。

**渡辺** あと五年後というのはどういう意味なんですか。

**塩野** それは比較的早くからできたまちを担当している部長さんの話なんですけれども、子育てがある程度終わった時期、というふうなことで言っているのではないかと思いません。

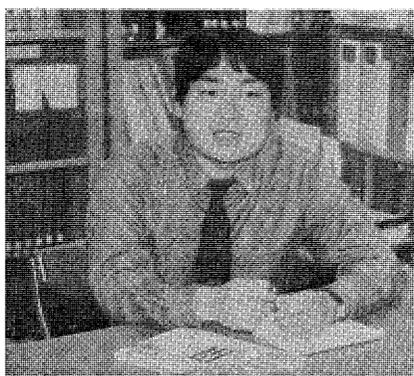
### 「自分のまち」を

**渡辺** 西谷はそういう意味では場づくりだとかかというの、比較的テーマになっていますよね。

**松井** そうですね。昭和三十年ぐら

いに入ってきたサラリーマン層と、商店街と地の人と、大体三極で動いてきて、その人たちがもう年とって今度はその子供さんたちの代になってきているんです。その人たちは西谷出身で、しかも、同じ小学校に行っているという意味では、顔をよく知っている。その世代は、三十代過ぎて四十代ぐらになってきて、今後もずうっとそこに住み続けていくだろうし、自分たちのまちというところをそろそろ考え始めている年代です。ただ、それがはつきり出てくるには、もう少し時間がかかると思うんですけれども。

さつき塩野さんが言われたよう



に、西谷の場合も十五分ほどで横浜駅西口へ出れますから、若い人たちが、まちの中で活動する必要がないわけです。だから、働くにしてもみんな外へ出ていっちゃう。そうした原因の一つとしては、地元でちょっとしたグループをつくったり何かしたりするというのがないというのもあるんですね。ですから、今度地区センターができて、自分たちのまちの中でそういうことができるようになったというところで、どこまでそういう人たちが、自分たちのまちの中で活動を始めるかなあという気があります。

ただ、さつき言ったように連合町会をつくったときには、町内会の人たちが勤労奉仕して建物をつくったり、していますから、最初の世代の人たちは自分たちのまちだという愛着はかなりあり施設などでつながっているものがあるようですけれども、その後の世代というのは、自分のまちというものを印象づけるような核みたいなものはないと思うんですね。

**渡辺** 祭りなんかはどうなんですか、盛り上がりたりするんですか。祭りとかないんですか。

**松井** 運動会はありません。神社の祭りもあります、大きく盛りあがるには今一步という感じですが。先ほど言ったように商店会自身も地域の問題を考え始めていますし、商店会と町内会が一緒になって、とにかく若い人たちを含めて何とかまちに関心を持たせようとしている。このままでは横浜駅西口にみんな出ていっちゃうという危機感はあると思うんですね。

### 組織対応を形づくる

**渡辺** 希望が丘というのは、そういう意味ではかなり組織的な動きがあるということですが。

**加藤** ただ、若い人という面で見れば、やっぱりいいですね。二十代とか十代の人たちが活動に参加してきているかという、これはどこでも同じだと思うのだけれども、難しいですね。

ただ、いろいろな試みが行われて、

希望が丘で大きな行事というのと、運動会と、それから、「高齢者を祝う集い」というのを毎年敬老の日あたりやるんですけども、それを地域にある二つの中学校で交互に開いたんですね。運動会をこちらでやるときはこちらで「高齢者を祝う集い」、翌年はそれを交換するという事です。

そのときに、ブラスバンドが出たり、合唱が出たりということ、必ず中学校の生徒が出演する、あるいは小学校の子供たちも出る。運動会にも「集い」にも両方出るということで、学校が地域の行事に参加していく方式を二、三年前から取り入れています。中学生ぐらいからだんだん地域に余り関心がなくなると思うのだけれども、そのころにそういう行事をやって、地域との交流を積極的に図ろうということ、学校側が地域に働きかけたら、地域の方もぜひやりたいということで、両方が一緒になって交流を深めたという。

それから、これはごく最近聞いた話なんですけれども、希望ヶ丘高校

というのがあるんですが、その校長が、地域との連携がどうも今までできていないので、そういうことをやってみようという話をしていて、そうなんです。高校が地域とつながりを持ちたいということなので、その辺がもうちょっとうまくいけば、小・中・高校などとの交流はかなり出てくるかなと思います。ただ、その上の年代はやっぱりないですね。

渡辺 しかし、どうしてそういう形の組織的な動きができるんですか。かなり皆さん意識的になられて、こういう形でうまく動いているんですね。

加藤 それぞれいろんな組織があるんですけども、連合自治会の中に、地域にある組織が殆んど加盟しているんですね。体育指導委員についても、青少年指導員についても、子供会にしても、婦人にしても老人クラブにしても。ですから、子供からお年寄りまで含むいろいろな団体がすべて、その連合自治会に加盟して、地域の行事をやる場合には、全部の団体が協力してやる体制をとっ

ているんです。だから、お互いやっていいことをよく知っていて、子供会の行事があれば他の団体が協力するなり、老人クラブの会合があれば、地域の組織全体と一緒に協力をするなりね。

だから、行事が重なるということはずなないし。それで、何々をやるというときには、どんな形でこの団体はその行事に協力できるかみたいなことを、それぞれの団体が話し合って参加していく。そういう組織をつくってくるのは大変だと思うけど、今はそういう形でできていますね。

#### 四——活動の担い手

渡辺 いろいろな活性化の材料とか必要性はあると思うのですが、男性と女性とでは、活動の担い手として、どのように違いますか。

塩野 この地域の主要な活動の一つである剣道部のコーチだとか、町友会と別のところで、父親は父親としての役割を果たしているというのが

あって、それが、町友会としてはやらないけれども、重層的にいろいろな活動をしているというのはあるんです。ただ、サラリーマンの場合には日曜日ぐらいしか出られないということがあって、町友会を支える主要な担い手は女性ということになっているわけですね。

主要な担い手といっても、かなりほかの地域と違うのは、町内会の政策判断とか、そういうところに対していろいろな話をしていくのはほとんどやられてないんです。ですから、トップの何人かの人たちがすべて決めて、あとは班長のまとめ役みたいな形でいる。というのは、決まった仕事を定期的になさって、それで大體仕事は終える。十七人の部長さんの下に班長がいますから、班長も同じように決まった仕事をやっているという形になりますね。

渡辺 じゃあ、自立した女性像というよりは、むしろ内助の功に近い。

塩野 そんな感じですね。ですから、最低限行政の仕事はこなせるという組織になっているんですね。

松井 結局、名前はだんなで、会合に出ていって、行政からの広報印刷物などを下に流したりするのは奥さんが代理で出てやっているという感じなんです。

渡辺 男性社会というか……。

塩野 そうですね。だから、僕なんかは、いっそのこと、部長だって女の人の名前で出してやった方がいいんじゃないかと思う。なぜ名前を男にこだわるのかというのはよくわからないですね。

渡辺 千秀もそういう傾向ですか。

大徳 いや、千秀はそんなことはないんじゃないですかね。

渡辺 担い手は女性ですか。

大徳 例えばPTAだとか子供会だとかは、もちろん女性がやっているわけですね。自主活動グループも大体女性が中心になっている。町内会のスポーツ活動も、女性が中心をなしている面もある。

ただ、町内会の主要な役員は男が占めていて、町内会の会合というのは夜やっていて、男が出て話し合いを持っていると思います。奥さんが

かわりに出るといふことはないと思っています。

渡辺 港南台はまた全然違ってくるんじゃないですか。

村田 いや、あんまり違わないと思います。やっぱり、平日の昼間の活動というのはどうしても女性が中心になりますね。千秀と同じで、子供会とかPTAとか、そういう子供に絡んだ活動というのはお母さんの層が中心になるし。あと、港南台で特徴的といえば、そういった主婦の人たちが、内助の功的なものではなくて、自分たちの楽しみとか生きがいみたいな自主活動的なものが、よその地区に比べると多いかなという感じがします。

あと、男の方から見ると、サラリーマン層が多いので、例えば自治会の役員を自営業の人がやっているとかいう状況は考えられない。そういうところからサラリーマンを排除してしまうと活動そのものが成り立たないから、サラリーマンの人がやりやすいよう活動の形態を選んで、例えば会合を夜やるとか、日曜日にや

るとか、そういうことはありますね。渡辺 だいぶ主婦の楽しみというような場は出てきていますか。

村田 そうですね。港南台の場合には結構公共施設が、港南プールという港南台のごみ焼却工場の余熱利用施設があったり、消防署の訓練室とか、銀行の会議室とか、利用できる場所はあるんで、そういうところで主婦の人が水泳をやったり体操をやったり勉強会みたいのをやったり、とかそういう場は結構多いようですね。

渡辺 西谷はどうですか。

松井 町内会はやはりまだ男の人が切り盛りしていますから、当然会合は夜が多いです。男性でも、どちらかというところ、一番トップの方は定年を過ぎたぐらいですかね。だから、職業から離れて比較的専念できる。あと、中堅の層は普通のサラリーマンの人たちで、夜とか土日を使っていろいろな活動を手伝うという感じじゃないですかね。

逆に別所の方が特異じゃないです

かね。昼間にやると、普通の人は参加できないですから、逆に会長がワシマンになっちゃう原因にもなるんじゃないですか。地域活動がやっぱり支える層をつくらないというかね。普通、だれも仕事を持っていないから、自営業の人だって、昼間働いているわけで、昼間出てくるといふのは、今、家庭の主婦か老人しかないんじゃないですかね。

渡辺 希望が丘はどうですか。

加藤 希望が丘は、会合は大体夜ですね。その場合に、女性も夜でも出席している。希望が丘の場合、会合が遅くなるんですよ。始まるのは大体七時か七時半ごろなんですけれども、その後で懇談会みたいなことが行われたりということ、町内会館を使う場合でもかなり遅いですね。それでも、女性も一緒にやっています。

松井 子育てが終わった人？

加藤 もう終わっている人。やっぱり三十年経っているんで、もう子供が独立しているとか、独立してないまでも大きいから、奥さん方が家事を



心配ないというか、あるいは娘がいて娘がやっているとか、あるいはだんながもうその辺理解しているんで、地域活動に夜参加することには別に問題ないという感じですね。

ただ、若い人の場合には、ボランティアで老人給食へ来る人などは、PTA役員をしている人が来たり、まだ子供が小さい人もぼちぼち参加している。最初に参加するときはなかなか大変だったらしいですが、今では落ちついてきて、子供が小さい人でも、土曜日だと、だんなが休みで子供を見ているとか、そういう協力がどんどんできてきたと言っているね。

## 五——まちを歩いてみえてきたもの

**渡辺** 取材に行かれたのは、最終的に行政という立場だと思うんですね。それに対する対応の仕方というのは、いろんな形で違うんじゃないかと思うんですね。その辺、取材がしやすかった、しにくかったみたいなどころを含めて、感想を聞かせていただけますか。

**地元に住む職員として**

**塩野** 僕だけ地元に住んでいるわけですが、この仕事を頼まれるまでは、僕自身が地元の地域とか自治会にはほとんど関心を持ってなかったんですね。それは一般的な市の職員と全く同じようなことで、自分の地域はどういう地域かと問われたら非常に戸惑ってしまうという状態だったんですね。

とにかく、いろいろな人に話を聞かないと、全然地域が見えてこないということがあって、この作業を中心に進めたわけですよ。南区役所

で持っているいろいろなデータというのは、あくまでも外観にしかすぎなくて、地域のいろいろなリーダーに会うときに、僕自身が責められるんじゃないかという気持ちがあったんですね。というのは、「あなたは自分の地域なのに、傍観的な立場で何をやっているんですか」という反発みたいなものがあるんじゃないかと。何を書くのか、何をしに来たのかという、目的がよくわからないということがあってですね。行政の職員というのは、どうしても不審な目で見られますからね。「取材です」と言うと、勝手なことを書かれちゃ困るといふものがあるって、やっぱり警戒されながら面談されたんじゃないかと思うのです。

そういう中でも、僕のことを表面的には反発するような目じゃなくて、とにかくいろいろな話を聞かせてくれたということで、好意的に受けられたという感じがしますね。あの辺は、僕が直接南区の市民課の地域振興係の職員ですと言ったら、また違う受けとめ方をされたんだと思う

んですけども(笑)。保土ヶ谷区の職員ですということもあって、気楽に話をしてくれた面があると思うんですが。

**渡辺** 住民であるということ、仲間意識というのはあると思うのですが。

**塩野** 僕自身も地域の住民の一員として、何らかの形で貢献していかなくやいけないのかなあと、自分に対する責任感みたいなものがありましたね。

僕は初めて区の職員になったときに、福祉事務所の福祉援護係長をやったんですよ。そのときに、これからは地域福祉の時代だということを強調されたんですね。だけど、よくわからないのは、主に財政事情で、国も福祉予算を削減するし、横浜市の補助金も削られる。一方、高齢化も控えているので、とにかく福祉に要する仕事なり財政は全部行政がやるというのではなくて、これからは地域の方で肩がわりしてもらわなくて困ることが強調されてね。地域福祉と言う以上は、地域の

中での福祉の活力というのはどの程度あるのかとか、それをどういうふうに行政が働きかけたらうまく広がっていくのかという、見通しみたいながないと、施策としての一貫性がないと思うんですね。そのときから僕は、地域というのは一体何だろうかという、自分に対する問いかけみたいのがあったんですね。

今度、区政推進課の調整係に来て、やっぱりそこでも、別な表現なんですけれども、これからは行政の守備範囲と地域の守備範囲をはっきりさせるべきだというのがかなり言われてきたんですね。そのときも思ったんですけども、守備範囲と言うけれども、行政の守備範囲とか地域の守備範囲というのははっきりと固まっています。わかっているのかどうかというものがあって、地域というのは区の職員がいる限り、絶えず関心を持っていかないとだめじゃないかという考え方があったんです。

保土ヶ谷区でもコミュニティ研究をずうっとやっていたものですか、地域のことをもっと知りたいと

いう欲求はあったんですね。そういうことがあって、今回地元でやらせてもらって、非常に勉強になった。

しかし、地域を見る目というのはいろんな見方がある、これでおしまいということはないという感じは今持っているんですけれども。

渡辺 そうすると、比較的障害もななく入り込めたというようなことですか。

塩野 そうですね。

渡辺 皆さん、塩野さんとは違いますが、逆にならぬ。「何しに来たの」というような感じというのはいりませんでしたが。

勤務地と地域のかかわり

大徳 僕は、勤務地なんですよね。

戸塚区役所の市民課の人間だということで行きますから。そうすると、向こうは、何をしに来たかよくわからないでしようけれども、ともかく区役所が話を聞きに来たということ

は、少しは自分たちにとって役に立つようなことをしてくれるというような期待もあるみたいで、行政に対

する要望というのはある程度言ってくるんですよね。

ところが、悪いことに千秀地区と最初の五十八年度にも一度調査をやっているんですね。その上で、六十年

度に再度取材に行った。何回も調査に入っているということ、その

たびにいろいろ要望みたいなことを言うんだけれども全然反映されないという不満みたいのがあって、やっぱり何をしに来ているのかなあというような印象があったみたいですね。

もう一つ、長尾台の町立幼稚園というのがあって、まさにつづれかかっていたんですね。行政が全然補助できないのがネックになっているという感じがします。役所が話を聞きに来たということ、ある程度期待感みたいのがあると思うんですけども、結局、何にもできないで、来年の三月にはつづれちやうみみたいなんですね。申しわけなかったのか……。そういう意味で、こちらの意図と、向こうの期待しているもの

とは随分ギャップがあったんじゃないかなという気がしましたけれども。

進行中の問題とぶつかるところですか。

渡辺 一番苦労されたのはどういう

大徳 私が苦労したのは全く別の話なんですけれども、この地域の小学校は、歴史があつて、百周年を超えていて、非常に地域に根づいている。

地域と一体になつていろいろな事業を展開しているんですね。普通の小学校の運動会とは別に、町内会と一緒にやるとか、「調査季報」にも取り上げられ、小学校の副校長がその事を書いたりしているんです。だから、モデル校というような印象を最初持っていたんですね。

ところが、ある自主活動グループのところへ行つたときに、小学校に対する不満が出てきたんです。小学校の地域行事が多くて、PTAの役員の負担が大変だということです。要するに、学校から押しつけられてや

らされているような感じで、自分たちが積極的にやっているんじゃない、自分たちの本当にやりたいことはまた別みたいな意見が結構出てきてたんですね。

それを聞いて、その次に学校の方へ取材に行こうとしたら、学校の方で最初拒否反応があったんです。何でそういうのがあったのか、よくわからなかったんですけど、小学校校長もそうだったし、PTAの会

長も、何でそんな調査に来るんですかみたいな感じでした。いろいろな話を聞いてみると、PTAを考える会みたいな、PTAを改革するような動きがちょうど出ていたときだということ、その辺の動きがあつて、

PTAの会長とか小学校の校長もちょっと警戒していた、というようなことだったみたいなんです。それでも何とか、納得してもらって話を聞きに行ったんですけども、でも今PTAでそういう動きがあるのか、その辺を本当は聞きたかったんだけど、結局聞けなかったというところはありましたね。その辺、触

れないで、向こうが言うような良いことばかり聞いて終わってしまった。報告書にもそんなことしか書けなかった。報告書を出す前に、必ず原稿を見せてくれとクギをさされちゃったので…。

渡辺 そういうダイナミックというか、一番形になりつつあるような部分には、行政の方とかを立ち会わせたくないという感じはあるんじゃないかね。

松井 取材を受ける側は当然、触れられたくない問題というのはしゃべらないですからね。

#### 住民の話を聞くことの大切さ

松井 私の方はちょっと違うんです。というのは、実はこの研究会のためにやったわけではなくて、調整系の事業として、地域のコミュニティを活性化するにはどうしたらいいかということ、町内会長、青少年指導員、体育指導委員、子供の会、会長とか、そういうグループ分けて、地域の人にお願ひして集まってもらって話を聞いたんです。それを

ベースにして書いたものですから、個別にヒアリングってそんなにならなかったんです。

そのときにも、行政が地域の人に聞くということは、実はあんまりやってないんです。例えば何かの事業を行いますから話を聞かせてくださいというのはあるけれども、そうじゃないと、地域のことを教えてくださいますか。そうすると、向こう側は、何のために来たかという、最初はどうしても警戒心みたいのがありますしね。だから、その辺がとれてくると、いろんな話はするんですけども。

ただ、多分今の話とも共通すると思うのですが、同じ話題をいろいろな人から聞いてみないと、本当のところはわからない。まずいというか、問題になつてくるようなことは余り話したくないというのが、どうしても出てくるんです。

それと、先ほど大徳さんが言われたように、行政に対する要望です。聞きに行くと、どうしてもそれを実

現してくれるんじゃないかという期待感が出てくる。その辺は、うちの場合はセクシオンとして力がないです。話をするときは、各局に、各課に話はしますけれども、そういうことは余り期待しないでくださいと、あらかじめ念をおしました。ただ聞くだけということでも、住民の方には非常に喜ばれました。話をしたということだけで、行政がこんなに親身に聞いてくれるのかという、そういう感じはほかの地区でも同じように感じました。

というのは、連合町内会長とかちよつと上の人の話は行政はいろいろ聞きますけれども、単位町内会長とか、小さい単位の会長さんなんていうのはしよつちゅうかわつていっているから。そういう人たちの話を行政がもろに聞くということは余りないんです。話を聞いてやるということ自体が、その人たちの気持ちを満足させるという、そういう効果はあるようです。

逆に、今度横のつながりが地域で必ずしもうまくいっていないから、

行政の方で今度は横をつなげるような会議をやってくれないかという、逆に注文を受けてしまいました。本来は地域の中でうまく連絡して、風通しをよくすべきなのが、十分できてない。そうした横につなげる役割を頼まれたこともありました。

全体としては、行政が話を聞いたということ、最初は警戒心がちよつとあるかもしれないですけども、最終的には行政に対する信頼感がありますから話をしてくれます。そういう意味では、一応どなたも協力してくれましたね。ただ、問題のある話までは、なかなか話してくれないが、当たりさわりないところでは随分話が聞けたと思うんですね。

### 住民に見えるものを

渡辺 特に苦勞されたとか、警戒心を解かれるまでに工夫されたとか、何かありますか。

村田 僕は、地域社会研究会というものがあるのかどうかを説明するの、何か向こうがすごくイメージしにくいみたいな感じがして、そ

れが苦勞といえれば苦勞でした。

僕は「広報よこはま」の仕事をやっているんで、取材は年じゅうやっているから、別に取材すること自体にはほとんど違和感がないんですけども。「広報よこはま」だと、「広報よこはま」です」って物を見せるなり何なりすれば、向こうがすぐイメージできるわけですね。ああ、あれに何か記事を書くために取材しているんだというのが、それが、地域社会研究会って口で言ってもよくわからないし。そうすると、何のためなんだろうというような感じがあるようです。

### 普段から接触を

村田 僕の場合はむしろすごく影響があったなと思うのは、僕は港南区役所の区民相談室というところにもう七年目なんです。港南台が新住民が住み始めてから十二年ぐらいだから、港南台というまちの今までの発展の半分ぐらいはつき合っている感じがして、その辺で、広報をやる前は区民会議とかやっていたんで

すけれども、そういうときに、港南台という土地柄と割と個人的に相性がいいみたいな感じがあって(笑)、港南台の人がいるいる率直に話してくれるんですよ。だから、言わない部分はもちろん言わないだろうけれども、例えば今活動の中でこういう問題があるんだけど、これはどういうふうにしたらいいでしょうかねえみたいな感じで、割合話してくれたなと思います。

松井 港南台は自主活動団体が実際にかなりあるし、また、彼が、仕事柄しよつちゅう出入りしているんで話しを聞かせてもらえたというのがあるんですね。ところが、ほかのセクションにいくと、ちよくちよく地域に行かないので、そういう意味では必然的に町内会長と、窓口が決められてくるんですね。その窓口からは見えない団体みたいなのは全然つかまえて切れなかったというのが、どうしてもありましたね。日ごろからのかかわり方というか、地域への入り方をスムーズにしよつちゅうやっているのと、全然そういうことをやっ

てなくて、たまたまこのために行くとなると、どうしても窓口が決められてきて、そういう限界みたいのはあったですね。

渡辺 村田さんはそういう意味では接触が多いセクションなんですけれども、普通の行政の人が入り込むというのはほとんど至難のわざというか、自分の窓口以外の声を聞いたりとか、全体性を見ていくというのは、ちよつと難しい状況なんですよ。

松井 私どものセクションは比較的、区政全般にかかわれるのですが、逆に何をやっているかよく知られていない。調整係というセクションがあること自体、大体住民の方は知らない人が多いんですね。逆に市民課の人たちは、比較的住民との接触が多いですが、それでも事業目的を持った場合しか、区民の方とはつき合わないのです。例えば青少年指導員なら青少年指導員と。同じ青少年指導員でも、地区の会長とかいろいろの親しいけれども、一般の青少年指導員とは余り接触がない。そういう意

味では、行政側というのは、地域のことにかかわっているようで、仕事のある一点の目でしかつき合いがないから、意外にネットワークが狭いですね。地域を今度のようにつかもうとすると、どうしていいかわからなくなる。地域に入ってみて、どこに聞きにいけばいいのかわからなくて苦労しちゃう。そういうことがあると思う。

大徳 僕は市民課にいるんですけども、市民課というのは、そういう地域の情報を把握していきやいけない部署なんだろうが、実際はあまりつかんでないですよ。僕は地域振興係ですから、町内会の担当なんですけれども、地区連合町内会長とは結構接触があるんですが、単位の町内会長と話をするということはめったにないですよ。そういうのが実態なんですよ。

#### 職員の姿勢が重要

塩野 村田さんの場合には区民相談室にいますので、比較的自由に地域に出かけていって、いろいろな人と話

し合うチャンスが多いと思うんです。その場合でも、地域の人たちと会うのが楽しみだとか、いろいろな話を聞きたいという職員の姿勢がないと、なかなかできないと思うんですね。

調整係にもいろいろな話はきまします。けれども、市で行っている広聴では、一定の形式を持った集会があって、町内会長が地元の要望を出すにしても、ある程度型が決まっているなど、必ずしも自由な話が聞けるところではないんですね。それから、直接調整係に来る住民の話というのも、大体連合町内会長が相談に来ることが多いのです。ですから、調整係にいても、特別に、地域に出かけていってみんなの話を聞くという仕事をつくるのか、自分で出かけていくとかいうやり方をしないと、本当のいろんな数多くの声というのは聞けないですね。

松井 区役所に勤める職員は、地域とのつき合いは意外にあるようにないんですね。自分の仕事の分野でのつきあいはあるが、それ以外はほと

んどない。もっと個人的にネットワークを持っていないと、本音も含めて、建前でない話が入ってこない。積極的に動くようなことを意識的にしないと、今の区の体制では、地域の状況はわかりませんね。

#### つき合う時間の意味

渡辺 加藤さんの取材上の苦労というのとは……。

加藤 苦労という苦労はないんですね、実を言うと。というのは、スタート時点は連合会長で、その人が市の職員だったということがあって、スタートの時点で地域の裏も表もしゃべってくれたんです。もちろん、その人から見た問題点ですけれども、いい面というのはいかがですよ、悪い面はこうですよというのを、地域の概略を詳しく話してくれたわけです。それがある程度入った上で、地域に入ったんですね。

それ以外の人との接触はどうかというところ、行事はともかく朝から晩までつき合っちゃおうということ、行事があると朝から行って、最後の

反省会まで全部つき合っちゃった。

だから、当初は、会長以外の人は、この人は何だろうと思っていたでしょう。ところが、会長が、この人はこういう人だ、市のこういうところ、こういう重要な仕事をしているんだ、という紹介をしてくれるわけですから、それで、発言してくださいって必ずやらされて。あんまりくだくだ言わないで、「地域の皆さんの活動をぜひ知りたからきょうは伺いました」と言って、つき合っちゃうんですね。今までの取材というのは、もし行ったとしても、行事のときだけであとは帰っちゃうと思うんですけども、とにかく全部つき合うようにしたんです。

地域の集まりも、夜遅いんです。一番遅かったのは、会合があって、話がはずんで十一時半ごろぼちぼち帰るといふ形ですね。それまでとにかくつき合っちゃうわけですね。そうすると、地域の姿がかなり見えてくるというんですかね。どういう環境で動いていて、どういう課題があって、それで、みんなが帰った後でま

た、実はこれが問題だとかかんだとかまた話が出る。それをまたつき合っている、全部出てくるといいますかね。表面の話だけじゃなくて裏の話も見えたということだったんです。その後もう一回、じゃあ、これはどうなのかと相手に聞けるわけですね。ということ、だんだん構造が見えていったというような感じがしますね。

村田 今、全部つき合ったという話があるけれども、そういうつき合う時間の長さとか、行く回数とかというのは、かなり意味があるんじゃないかという感じがしますね。

松井 やっぱり顔見知りにならないとね。

加藤 ともかく、あ、また来てるなという感じだね。

村田 同じ人に何回か話を聞きに行くと、極端な場合だと、もう話すことはあんまりないから、ビールでも飲んでいきなさいよとかね(笑)。

松井 そうは言っても、人間、すべての人につき合うわけにいかないんで、ある程度目的を持っているんで

しょうけれどもね。やはり日ごろから、深さよりも数が最低必要だと思うんです。ネットワークというか。

その地域の多くの人に会って、顔が広いというかね。さっき言った表のルートではなくて、個人的なルートからもいっぱい情報が入ってくる、あそこで何かがあったと。理想は、逆に机の前に座っているだけで、向こうの人からいろいろな話が聞ける

という、そこまで顔が売れているというか、そこまできけばよいのです。そういう職員というか、地域を少しでもつかんでいる人がもつとふえてくれればと思う。

地域のつながりがみえてくる

村田 僕は、今までの仕事柄もあって、ある程度話を聞ける人というのを、点としてはかなり持っていたんです。今回、集中的に港南台を取材してみても、点だったのが割と線でつながってくるんですよ。それが自分で取材していてすごくおもしろかったですし、ある程度までつながっちゃうとあとはつながる一方なんです。

そうすると、例えば初めて取材に行く相手でも、だれかしらの知り合いだみたいな感じがあって、話を聞いていると、自分の子供と、僕が前に取材した何とかさんの子供は小学校のときに同級生でどうのこうのとかね(笑)。そういうのが、ある程度地域に入って取材しちゃうともうどんどんつながってきましたね。

## 六——これからの行政

渡辺 しかし、住んでいる住民の側から言えば、今度逆の立場ですよ。区役所なら区役所へ行って、こういう問題があるから何とか相談したい

と思う。例えば相談室があるからといって、またその状況によって違いますよね。それはうちの部署じゃないという先入感もあるでしょうし、例えば顔なじみの人がいても、途中でかわってしまおうということもよくあることです。

そうすると、例えば今後、個人の力といいますか、担当者地域の人々と密接につき合おうというよう

な、仕事以上の意欲がないとつき合えなくなっちゃうのかな。それとも、こういうポストとか、何か工夫しようがあるので。住民もそのポストに行けば何かそういう形でのトータルな話し合いができるような機会とかがあればいいんじゃないかと思うんですけれども。

## 地域担当制

松井 今回の提言の中にある地域担当制というのも多分そういうイメージがあると思うんですよ。行政の側でも、縦割りでは、必ずしも地域の問題をつかみ切れない。縦割りじゃなくて、地域割りのセクションが必要じゃないかと思う。例えば区を三つに分けて、北部地区なら北部地区はあそこに行けばわかるみたいなのが、そろそろ必要になってくるんじゃないですかね。住民対応部門と

それとあと、区役所というのは大  
体諸証明の窓口業務が多くて、そう  
いうところは、はっきり言って地域  
とはそれほどかわりがないんです  
ね、そういう部門から、今度はもつ  
と手ざわりというか、職員も地域と  
顔見知りになるような、そういうよ  
うな部門をふやしていかないと、今  
の体制ではまず、市民課、区民相談  
室を入れても十何人の人では到底、  
地区ごとの顔はわかりません。ある  
程度そういう部門を充実させないと、  
無理でしょうね。

できればそういう、何々の事業は  
何々課じゃなくて、おれの地区は何  
々地区担当へ行けば何だつてわかる  
よ。話が通るよみたいにするれば、住  
民の方も行きやすいと思うんです  
ね。もつ極論すれば、その地区に  
出先みたいなものをつくってもらっ  
て、そこへ出かけていけば何だつて  
わかるみたいな……。そこまでき  
るかは別にしても、そういうのが今  
後必要になってくるでしょうね。  
渡辺 いろいろお話を伺ったんです  
けれども、特に最後に、今回報告書

に表現しきれなかったような部分で  
こういうような視点が欲しいなあ  
か、ちよつとこの辺補足したいとい  
うのがあれば、簡単に出示していただ  
けませんか。

#### 新しい見方を

塩野 自分が勤めている市なり区な  
りに対する問題提起ということから  
言うと、都市化が進んで、全市的に  
下水道や道路など基幹的な整備をし  
なきゃならない時代は、個々の地域  
を大切にするというよりも、全体的  
に、道路を広げなきゃいけないなど  
の事情で、そこに住んでいる人の生  
活環境の改善要求とか、コミュニテ  
ィーに対する支援とかができていな  
い状況があったと思うんですね。そ  
れはやむを得ないかもしれないけれ  
ども、そのときに行政が、例えばい  
い自治会と悪い自治会というふう  
にも評価をすると、要求ばっかりど  
んどん出して、市のいろいろな施策  
に対して必ずしも協力しないという  
のは悪い自治会であつて、いい自治  
会というのは行政の施策をすべて受

け入れてくれるというか、もしその  
地域に問題のあるような施策を投げ  
かけたとしても、住民の欲求不満を  
自治会長がまとめていくのがいい自  
治会みたいなどらえ方をしていたと  
思うんですね。

確かに都市化の矛盾の中で、行政  
にも限界があるだろうと思うので、  
そういう自治会の役割みたいなもの  
も、行政とうまく調和した上で段階  
的に環境改善を図る調整役を果たし  
てくれるような自治会長というの  
が、理想的なタイプとしてあつたの  
かもしれない。けれども、最近の行  
政の姿勢は、あらゆる面で地域の力  
が必要だというふうに変わつてきた  
んですね。従来の、例えばワンマン  
で、いろいろな内部的な欲求不満を  
抑えるというタイプの自治会長では  
だめだと。むしろ、地域のコミュニ  
ティーの醸成を十分に図って、自主  
解決能力のあるような、組織主導型  
の自治会でなくてはだめだというふ  
うに、行政の期待というのが変わっ  
てきているんですね。

ですから、その辺を、行政は地域

に責任を負わせながら今までまちづ  
くりをしてきているんだから、新し  
い状況に見合った手当みたいなもの  
は、きちんとやっていかないとだめ  
なんじゃないかという気はしている  
んですね。

#### 地域と行政のかかわり

渡辺 地域は地域の論理があつて、  
そういうような行政云々ではなく  
て、それぞれままとまっていこうとか、  
活力をつけていこうという形でやっ  
ていると思うんですね。地域はさま  
ざますから、さまざまあり方が  
あると思いますね。行政の要望が時  
代に合わせて転換していくというよ  
うな、行政の論理というのがまた別  
にあると思うのですけれども、その  
辺の接点でのずれとか、また逆にま  
とめる上でも、行政がどこまできか  
わつていいのか、どこまでアプロー  
チするか引くかという、その辺の線  
引きというのは難しいですね。取材  
のとき、どういう印象を受けました  
か？ 要するにどこまでやればいいの  
かとか。

松井 その線引きというのは、地域の实情によって違いますしね。任せ方がいいところもあるし、逆に行政側がある程度仕掛けなきゃいけないところもあります。さっき言ったまらの成熟度によっても違いますし、その辺はちよつと言えないんですけれども。

ただ、行政の施策の打ち方というのが、まず施策があつて、その施策を実現するために地域に入っていくという構造になっている。まず地域がありますよというところからの視点を入れていく方が重要だと思ふんです。今までの方法は施策がまずあつて、その実現のために地域におろ

していくという構造です。地域がまづあつてという視点を施策決定の中にいかに入れていくかということをしていかないと、行政の地域へのかわり方というのは変わっていくよ

うで変わっていくかと思ふのです。

村田 地域の实情がいろいろなんだから、それをちゃんと見なければ線引きってできないはずだし、地域のあり方自体もどんどん変わっていくのだから、線引き自体がどんどん変わっていくと思ふんですね。だから、そういう意味では全然、まだ線引きなんていう段階に行つてないという感じじゃないかと思ふんです。

加藤 それくらい、行政は地域の实情がわからないから、行政の方で勝手に線引きを、あつちへ引いてみたりこつちへ引いてみたり。やつてみたら結局うまくないから、またこつちへ引き直してみたりしてね。地域の方は逆にしたたかさがあつて、行政がこの辺までやるんだつたらそれを利用しちゃえとか、こつちへ行つたらそれに合わせておけばいいやぐらいで、地域の实情に合わせた地域の仕方であつてやっています。各種委員などから行政担当への報告は行政のスタイルに合わせて出されているから、行政側からすると地域の活動の实情はなかなかわからないんです。

ね。やっぱり行政はまだ地域の实情をよく知らないで施策を打っているところがあるわけなんです。松井 そこに気がきますね(笑)。渡辺 本場にさまざまなお話が出ながらも、行政の問題というのは最終的にここに返ってくるわけですから。これを機会に、こういうような作業というのは続けられていくということが、まず必要なことのような気がしますね。そういう意味では非常に期待を込めて、この会を終わらせていただきたいと思ひます。本場にいろいろありがとうございました。